



## 今月のトピック

栽培期間を通して  
確実に着果させましょう



イチゴでは頂花房の開花が、夜冷処理苗では10月上旬から、普通苗では10月下旬から始まります。確実に受粉し、受精させることが収量につながります。送粉昆虫を適切に使用、管理していきましょう。

## 送粉昆虫を使いこなそう

### 送粉昆虫一覧

イチゴの受粉に使用する、代表的な送粉昆虫を紹介します。

送粉昆虫	活動温度	紫外線の必要性	使用期間*	必要数 (10aあたり)	シーズン使用量 (6ヶ月の目安)
ミツバチ	15~25℃	あり	2~6ヶ月	8000匹/箱	1~3箱
クロマルハナバチ	10~28℃	あり	1~1.5か月	1箱 (働きハチ50頭以上)	4~6箱
ビーフライ	10~35℃	なし	2~3週間	4~5パック (約4,000~5,000匹)	32~60パック

\*使用環境により異なります。

### 管理のポイント

#### 🐝 ミツバチ「イチゴの送粉昆虫のスタンダード」

- ・巣箱は、太陽光を確認しやすい位置に設置します。ハウスが南北棟なら巣箱は北側に設置し、巣門は南向きにします。東西棟なら巣箱は西側に設置し、巣門は東向きにします。また、長時間直射日光が当たらない場所に設置します。
- ・ミツバチが巣箱に戻りやすいように、よく見える高い位置に設置したり、目印となる青い看板等を設置したりすると良いです。
- ・ミツバチにとって、イチゴは蜜や花粉が少ないので、エサを適切に与えることで、巣箱の持ちが良くなります。

\*詳しい管理方法は借り入れた養蜂家や購入したメーカーにお問合せください

#### 🐝 クロマルハナバチ「少ない頭数でも、たくさん訪花します」

- ・巣箱が高温にならないように、日除けを設置し、底冷えしないように高い位置に設置します。日除けと巣箱の間には空間を作りましょう。
- ・開花数が少ない時期は過剰訪花の恐れがあります。午前中のみや1~2日おきに飛ばすなど出巢制限を行いましょう。その場合は乾燥花粉を与えてください。
- ・①乾燥花粉を与えても減っていない②新女王バチがいる③巣内のハチが少なくなってきた④ハチの出入りが見られなくなってきた場合は巣箱を取り換えましょう。

## ビーフライ「活動に紫外線不要、刺しません」

- ・ **寿命が2～3週間**で、ミツバチよりハウス外に逃亡しやすいため、1～2週間ごとに継続的に導入する必要があります。
- ・ ハウス外への逃亡防止のためには、**3mm以下の目合いのネットを開口部に展張**する必要があります。
- ・ ハウス内に果実の残渣があるとそこに集まり、訪花しにくくなります。**ハウス内を清潔に保つ必要があります。**
- ・ ミツバチに影響のない農薬にも注意する必要があります。

## ミツバチを基本とした受粉方法の提案

### ○開花初期…必要に応じて人工授粉をしましょう

開花始めの頃は、ミツバチの導入が遅れ気味になりやすく、ミツバチが訪花活動を行うまでは、柔らかい刷毛等で人工授粉をする必要があります。人工授粉が大変な場合は、ビーフライがおすすめです。開花始めで花数が少なく、過剰訪花の恐れがある場合でも、ビーフライなら安心です。

### ○低温期…クロマルハナバチ、ビーフライを併用しましょう

低温などによりミツバチの活動が鈍ってしまったときは、代替としてミツバチよりも低温や低日照でも訪花活動を行える、クロマルハナバチやビーフライを導入しましょう。

※クロマルハナバチを併用する場合…ミツバチの巣箱から数メートル以上離して設置します。

※ビーフライを併用する場合…必要数の目安は2～3パック/10a

### ■送粉昆虫の利用スケジュール■

開花期	10月	開花始め	ミツバチ	人工授粉またはビーフライ
	11月			
	12月	低温期		クロマルハナバチ ビーフライ 併用
	1月			
	2月			
	3月			
	4月			
5月				

## 低温期は日中の温度に気をつける

ハウス内の気温は送粉昆虫の活動に影響しますが、イチゴの花粉にも影響します。開花から受精までの適温は15～24℃といわれており、順調な開花～受精のために低温期は日中の加温も検討しましょう。